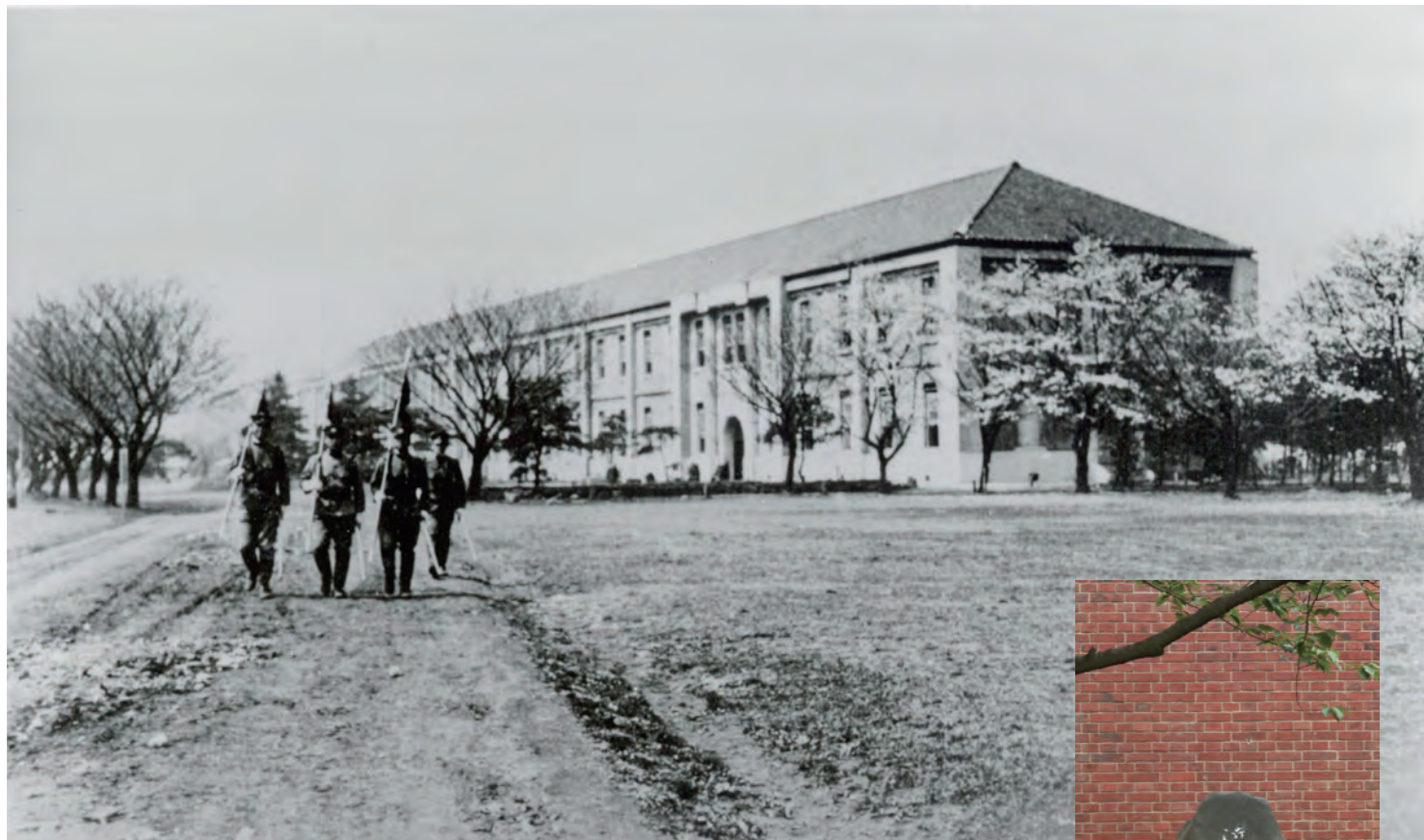


学習院アーカイブズ ニューズレター

15

Gakushuin Archives Newsletter 2020.2.20 vol.



「近衛騎兵聯隊之跡」碑

近衛騎兵連隊時代の戸山キャンパス (学習院女子大学資料収蔵室所蔵)

後方の建物が当時の近衛騎兵連隊兵舎(大正2(1913)年竣工)、現在戸山キャンパスに残る女子大学4号館・女子部B館である。昭和20(1945)年の空襲で青山の校舎を失った女子学習院が、翌年この近衛騎兵連隊の跡地に移転して授業を再開した。
(関連記事:本誌2-3頁、本ニューズレター第3号4-5頁)

Contents

戸山キャンパスの建築遺産 ～4号館・B館 学習院女子大学国際文化交流学部 国際コミュニケーション学科 准教授 ウーゴ・ミズコ	2
児玉幸多 一戦前・戦中・戦後の学習院を支えてー 清水文雄との交流を中心に 学習院大学史料館 学芸員 丸山 美季	4
戸山の男子中等科 一生徒の声よりー 学習院アーカイブズ 桑尾光太郎	6
主な活動(2019年7月～2020年1月)	8

戸山キャンパスの建築遺産

～ 4号館・B館

学習院女子大学国際文化交流学部

国際コミュニケーション学科

准教授 ウーゴ・ミズコ

(学習院アーカイブズ運営委員)



はじめに

戸山キャンパスに近衛騎兵連隊時代の建物が二棟残っている。1911(明治44)年から1913(大正2)年の間に建てられた旧兵舎と旧炊事場・風呂場(現女子部C館)である。現在、どちらも教育施設として再利用されているが、その特徴と歴史については、「戸山キャンパスに残る兵営建築」(『学習院アーカイブズニューズレター』第3号(2014年2月))に石川和外先生が紹介している。現在、女子大学4号館・女子部B館(以下、4号館・B館)として女子大学および女子部の校舎として使われている旧兵舎は2019(令和元)年の秋より躯体調査を実施しているが、これは今後行われる耐震補強工事の詳細を決めるためである。工事は、歴史的建造物の特徴や、時代の変遷とともに重ねられた痕跡を尊重しながら実施される方針であるが、利用者の安全を第一に考える中、場合によっては建物の現状を変更せざるを得ないこともある。そのため、躯体調査に先立ち、建物の現状を留めおくことを目的として、9月に目視と写真により記録調査が行われた。

今回の記録調査により、これまでよくわからなかった建物の構造や内装の変遷が明らかになったとともに、それぞれの時代の特徴が建物に刻み込まれ、われわれの想像以上に良好な状態で残されていることが確認できた。調査報告書を参考に、ここではとくに内部空間、とくに建具に関する詳細について紹介する。※部屋の名称は、調査以前のものである。

細部に認められる建物の変遷

4号館・B館は、2階建て、イギリス積み煉瓦造と鉄筋コンクリート造による混構造、寄棟屋根の建物である。正面である南側には、半円アーチによる二つの入口がある。その周りは西洋建築を連想させる大オーダーの装飾が施されている(写真①)ほか、鉄筋コンクリートの梁や付け柱が建物の周りを整然と囲んでいるが、それらは関東大震災後の補強として加えられたものである。補強前の外観は、古い絵葉書「(近衛騎兵連隊) 營舎」で、1918(大正7)年頃の竣工間もない建物の様子において確認できる。1994(平成6)年に、女子大学7号館の建設のため切



① 南側のアーチ型出入口の一つ



② 大正中期(1918年頃)の建物(絵葉書「營舎」岡健司氏寄贈)

断された西側立面の様子もうかがえる(写真②)。

外観は、質素でありながら、丁寧に造られており、開口部の周りは意識的に機能性の高いデザインになっている。内部でも、建物が建てられた明治末期から、短期大学時代までの痕跡が残っており、近衛騎兵連隊のみならず内部に関しては、建物の変遷をうかがえる痕跡が多く残っているが、とくに木材を使った構造や仕上げに注目できる。二か所の階段室の1階は石張りであるが、他は板張りだった。当初の木材と思われる床は、例えば、女子部物品倉庫にそのまま残っている。この部屋には、近衛騎兵連隊時代の仕様を多く確認することができ、当時の騎兵の暮らしが想像できるほどである。特に、東西に設置された造り付け棚と、出入口の柱は創建当初のまま残されている(写真③・④)。

まず、腰壁の上に設置されている二層の造り付け棚は、当初は「被覆棚」と呼ばれた。就寝する部屋に設置され、木製の棚板を二枚合わせ、下から山型鋼(アングル材)で支えられている。騎兵が生活用



③ 1階女子部物品倉庫、南面を見る。中央部に、かつて入口として使われた二本一組の木柱が見える



④ 1階女子部物品倉庫、北東隅を見る。「被覆棚」と呼ばれた、近衛騎兵連隊時代の棚



⑤ 2階女子部国語科準備室、北面を見る。かつて入口だった二本一組の木柱の上に鴨居と束が見える

品を置くために使われた棚で、衣類などを掛けるための釘もそのまま残っている。歩兵用の棚は一層と決められたが、騎兵連隊は二層の棚を許されていたことも確認できる。

次に、多くの部屋で見られる二本一組の柱について(写真③・④・⑤)だが、これらの柱は構造材である一方で、計画的には兵室の出入口に相当する。その出入口に扉は設けられていなかったが、上部に鴨居と束や筋違を設けており、内装における一種のデザインとして残存している。そして、柱の両サイドは後に化粧材で隠されるが、ほぞ穴があり、そこがかつて銃架であったことがわかる。

他の内部建具として着目すべきは、女子部生徒課倉庫の出入口である(写真⑥)。こちらの木製の建具は、枠も扉も兵舎時代のものが残存している。片



⑥ 1階女子部生徒課倉庫 上部欄間の右端の一枚が「銀線」ガラスである

開き扉、または両開き扉であり、上部に欄間が設けられている。中でも、女子部生徒課倉庫の出入口の欄間には5枚の板ガラスが嵌め込まれているが、歪みや気泡から左4枚は近衛騎兵連隊時代当初のガラスと思われる。しかしながら、最も珍しいのは右

の1枚の「銀線」ガラスである。兵舎から校舎へと改修された時のものと思われる。「銀線」は、1948(昭和23)年3月から1949(昭和24)年11月までの間に生産された学校補修専用ガラスである。当初、燃料の供給不足のため板ガラス生産が停滞していたが、学校教育の復興を優先的に考えたGHQは学校補修専用ガラスの生産を進めた。盗難防止のため、ガラスの表面に51mm間隔で凸状の平行線がつけられた。生産が短い期間だった点で希少であり、戦後直後の教育機関の状況を理解するうえで大変貴重なものである。

最後に、1階と2階の防火シャッターを取り上げる。1階と2階の階段室と廊下との境に鉄製の防火シャッターが設置されている。自動落下式のスチールシャッターで、東京・巣鴨の建築金物商會のもので、関東大震災後に日本国内で広く使われるようになった。そのため、4号館・B館にもその時代に設置されたと考えられる。

終わりに

今後の躯体調査では、建物の構造補強に関する情報が得られるだろう。9月に行われた写真撮影と目視調査では、建物の変遷、それぞれの時代の建築的特徴についてあらたに分かったことが多い。両調査の成果がうまく統合され、4号館・B館の再利用に活かされることを強く望む。

補強後の建物には、研究室に加え、収蔵資料の倉庫、学芸員課程の実習室、戸山キャンパスの展示室の配置が予定されている。教員や学生が戸山キャンパスに残る建築遺産を十分に堪能できるように再利用計画が実施されることが、建物にとって最良の将来像と言えるのではないだろうか。

参考資料

(株)文化財保存計画協会『学習院女子大学4号館・女子部B館記録調査報告書』令和元年11月

見玉幸多 —戦前・戦中・戦後の学習院を支えて— 清水文雄との交流を中心に



学習院大学史料館 学芸員 丸山 美季

学習院にとって、戦中から戦後直後の時期は学校存続の危機であった。その苦難の時代を乗り越え、昭和22年(1947)に私立学校財団法人学習院として再出発を果たした。先頭に立って手腕を振るわれた山梨勝之進(1877-1967)、安倍能成(1883-1966)院長は有名であるが、両院長のもとで、教員の中心となって実務にあたったのが見玉幸多(1909-2007)であった。見玉と共に新しい中等科を目指して尽力



教官服姿の見玉幸多

した教員の中に、三島由紀夫(当時平岡公威)の師としても知られる清水文雄(1903-1998)がいた。見玉と清水が、学習院が困難な時期にその将来を共に考え、互いに信頼しあう同僚であったことはあまり知られていない。ここでは、見玉の足跡をたどりながら、清水との交流を中心に紹介したい。

学習院教授になるまで

見玉幸多は、明治42年(1909)12月8日、長野県更級郡(現千曲市)稲荷山町の式内社治田神社の代々世家の家に生まれた。大正11年(1922)に12才で上京し、成蹊中学校、東京府立第二中学校(都立立川高校の前身)、成蹊高等学校を経て、東京帝国大学国史学科に入学。大学では日本近世の農村史を専攻し、卒業後は農林省嘱託として「林政史資料」編纂に従事し、昭和9年(1934)に鹿児島県の第七高等学校造士館(現鹿児島大学)の教授となった。昭和13年(1938)正月、29歳の時に学習院教授の板澤武雄(1895-1962)から誘われ、4月に学習院教授に就任した。

奇しくも同じ年の4月に、清水文雄も学習院講師嘱託、8月に教授となった。いわゆる同期にあたる。清水は、昭和7年(1932)広島文理科大学(現広島大学)を卒業し成城学園に勤務した



疎開先日光にて清水文雄
昭和20年

後、学習院教授で広島文理科大学の恩師である東條操(1884-1966)の推輓により、学習院に移ったのである。

戦前・戦中

昭和14年(1939)10月、海軍大将山梨勝之進が第17代院長に就任した。山梨院長は、式日の学生への講話で、好んで歴史上の事例を引いて教訓された。そのため、見玉は式日の前には口頭または文献をもって院長の諮問に応ずる必要が度々あったという。

昭和16年(1941)の太平洋戦争開戦後、学習院の教育にも戦争の影響が大きく出始める。中等科以上の勤労働員が常態化し、昭和18年(1943)からは高等科生の学徒出陣が始まる。昭和19年(1944)6月22日に、見玉も応召され長野県に赴くが、即日帰休となり、学習院の勤務に戻った。同年7月兼任事務官に任じられ、以後、皇太子明仁親王殿下(現上皇陛下)のご教育に関する役目を命じられ、東宮殿下教科書編纂案の策定などに携わる。同じように清水も国文の教科書案の作成や学習院在学の皇族教育について検討を任され、見玉をはじめ同僚と何度も相談を重ねていたことが、清水文雄「戦中日記」¹に出てくる。

戦況が悪化する中、見玉は学習院の学生の集団疎開や勤労働員その他の非常措置の計画や実施に全力を尽くし、その合間を縫って各地に分散する教え子の疎開先、勤労働員先に足を運んだ。その途上の列車乗車中に空襲を受け、山の中に逃げこんだり、座席の下にもぐったりして難を避けるなど、危険な目にもあったという。この頃清水は、昭和20年(1945)入学の中等科1年生の日光疎開に付き添い、学寮生活を送っていた。

昭和20年4月13日夜、目白の学習院も空襲にあい、木造校舎・寄宿舎の大部分が焼失した。

終戦と小金井での出発

終戦後、官立学校から私立学校として存続する目途がついた昭和21年(1946)、山梨院長に代わって、安倍能成が18代院長に就任する。その時、中等科1・2年生は東京都北多摩郡小金井町(現小金井市)に移っていた。この小金井校の開設にあたっては、見玉は、山梨院長の片腕として、場所の選定・確保に当たり、

開設後は小金井校主任となった。移転については、昭和21年には皇太子明仁親王殿下が中等科に進まれることになっていたことや諸種の事情から、中等科の弊風を除去して、清新の気を盛り込む意図をもって、計画されたと伝えられる。しかし、焼野原と化した東京周辺で校舎を求めることもできず、新しい建築も不可能であったため、長野県松代の大本営予定地など不用となった軍施設が候補に挙がった。児玉は、いくつかの候補地を見て廻ったが、全寮制を採用する場合の宿舍や食糧の問題などを考えると、どれも不相当であり、最後に決まったのが、小金井にあった文部省の教学錬成所の跡地（現江戸東京たても園）であった。

昭和21年4月、皇太子明仁親王殿下が中等科に進学され、東宮御仮宮所も小金井に造られた。小金井の校舎は木造の質素な校舎で、皇太子明仁親王殿下の教室でも雨もりがするほどであった。そうした過酷な状況の中でも、新しい校風を作りあげようとして、小金井校の教職員の意気は盛んであったという。しかしながら、その運営の面では大変な苦労があったようである。

この頃児玉は、広島に帰郷していた清水に送った書簡(昭和21年8月2日付)ⁱⁱの中で、

「(前略) 九月以降も決して安易な途ばかりではないと思ひますが常に希望だけは失ひたくありません。一つの途で希望を失ふといふことは全部の途で希望を失ふことだと思ひます。事の成る成らぬは別です。死ぬまで外と戦ひ内と戦ひ(戦ふといふ言葉は余り好まぬのですが別にうまい言葉も見当らないので)茨の道を歩みつゞけなければならぬのに希望を失へばその時で終りです。

寮ⁱⁱⁱもできるだけ早く開きたいと思つてゐますからどうか御計画をき下さい…(後略)」

と苦しい胸の内を吐露している。

昭和22年(1947)4月、清水は学習院を辞して、郷里の広島へ帰ることとなる。学習院を辞職することについては相談がなかったらしく、後年、児玉はこう述懐している^{iv}。

「(前略) 家族を広島にしているので、そちらに帰りたい意向を洩らしていたが、僕に相談すると、とめると思つて、清水君は安倍先生に直接辞意を告げた。安倍先生は「去る者は追わず」ということを口ぐせにされていて、退職しようとした人を止めたこ

とがない。清水君のこともあっさり承諾されてしまった。そこで僕は安倍先生に文句を言った。「いなくても困らない人もあるけれど、清水君のようなすぐれた教育者を失うのは学習院の大きな損失である。しかも直接に関係のある僕に一言も意見を聞かれなかったのは誠に困る」というようなことである。(後略)」児玉がいかに清水を頼りに思っていたかが窺える。

翌23年(1948)、児玉は中等科長に任じられて、小金井校の運営に奔走するが、遠距離通学の問題などや諸般の事情により、移転が計画された。児玉をはじめとして中等科の教員は小金井を去ることに反対したが、昭和24年(1949)に中等科は新宿区戸山町へ移ることとなり、小金井校は3年余で幕を閉じた。



小金井光華殿前で 後列右より3人目が児玉幸多 昭和23年頃

別々の道へ

その後児玉幸多は、昭和13年の奉職以来70歳までの42年間の長きにわたって学習院と歩みをともし、中等科長・女子短期大学学長・大学学長として学習院の運営に顕著な貢献を果たした。一方、清水文雄は、昭和22年に広島に帰ったのち、広島大学教授、比治山女子短期大学学長(現比治山大学)を歴任した。東京と広島と場所は違えど、共に研究・教育に生涯を捧げた人生であったといえるであろう。

戦後75年が過ぎ戦争の記憶が薄れる中、学習院の再生・発展の影に、児玉、清水をはじめとした教員や関係者の多大な尽力・苦労があったことを忘れてはならないと思う。この拙文が、戦前・戦中・戦後の学習院の歴史とともに歩んだ児玉の人となりや、その生涯に思いを馳せるきっかけとなれば幸いである。

i 清水明雄編・前田雅之解説『清水文雄「戦中日記」-文学・教育・時局-』（笠間書院、2016年）

ii 昭和21年8月2日付、清水文雄宛児玉幸多差出書簡（清水宏輔氏所蔵）

iii 昭和21年9月に教学錬成所時代に教員の学寮であった建物を山梨院長が「光雲寮」と名付けた寄宿舎ができた。同寮は、昭和23年度(1948)末に閉寮し、翌年「清明寮」と名称を変え高等科の寄宿舎として再び利用された。

iv 「戦後の中等科と安倍先生の思い出」（『輔仁会雑誌』189号、昭和41年12月）

*本稿の作成にあたり、児玉茂幸氏、児玉照幸氏、清水宏輔氏、清水明雄氏はじめご協力を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

戸山の男子中等科 —生徒の声より—

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

1. 小金井から戸山へ

昭和21(1946)年4月、学習院中等科(旧制)の1年・2年が小金井に移転した。中等科と高等科の分離は戦時中から検討され、世田谷区喜多見への中等科移転が計画されていたが戦局悪化のため実現しなかった。皇太子明仁親王殿下(現上皇陛下)の中等科進学に加え、空襲で目白校地が被災したことや都心の食糧事情が移転の要因だった。昭和22(1947)年4月、学習院と女子学習院は宮内省から離れて財団法人学習院となり、私立学校としての一步を踏み出した。同時に学制改革のため、小金井の中等科(以下男子中等科と表記)は3年制の新制中学校となった。

同年10月、学習院の教育方針や新設される大学の内容などを審議する「学習院教育委員会」で、安倍能成院長は「小金井は通学にも不便にして、又東宮中心なり。然れども目白へ合併せば高学年生よりの悪影響もあらん。…通学上の問題、東宮の御卒業などよりして、概ね小金井は目白に合併すべし、との意見強し」と発言し、出席者に意見を求めた。児玉幸多小金井校主任は「余個人の意見としては、カレッジと中学とは、多少の距離を有すべきなり。…但し、現実の問題としては目白合併も止むを得ず」と述べ、桜井和市高等科長は「小金井校は目白以外の場所に置かるべきなり」、宗武志委員は「余も各科分置を可とす…例えば戸山校の一区画に小金井校を設置する如し」との見解を示した(学習院アーカイブズ蔵「教育委員会記録」)。児玉は後に「小金井の遠いということについては、父兄の間から苦情が出た。…僕などは、遠いと思うのも一時のこととして、小金井を去ることに強硬に反対したけれども、目白の方では、小金井の叛乱部隊のような評判を立てられて大勢には抗しきれなかった。中等科の教官が移転に反対したのは、折角できつつある新しい校風というようなものが失われることを恐れたのである。」(児玉「戦後の中等科と安倍先生の思い出」『輔仁会雑誌』189号、昭和41年12月)と顧みている。

昭和22年11月12日の学習院理事会は小金井中等科

の移転方針を確認し、翌23(1948)年10月22日の理事会で「中等科戸山移転ハ至急実行スル」決定がなされた。昭和24(1949)年3月24日の終業式をもって小金井校は閉鎖され、男子中等科は4月から女子中等科・高等科のある戸山に移転した。

2. 戸山の校地と校舎



戸山の男子中等科本館、右側が増築部分

戸山校地は元近衛騎兵連隊跡地で、男子中等科は敷地の南側にあった旧連隊本部の建物に教室を設けて本館とし、医務室・旧将校集会所の一室を教室や音楽室として使用した。これらの建物は当初から「材木は堅牢でも、すでに古びた、暗いものであった」(児玉前掲)。また女子部と共同使用していた理科室や講堂へ行くには、校地を南から北へと横断しなければならなかった。昭和24年10月に本館西側に広がる平地がグラウンドに整備され、翌25(1950)年には2階建ての木造校舎が増築されるなど、学習院が財政難で苦しむ中で教育環境の整備が徐々に進められた。そして校舎の南東側に広がる裏山の林は、生徒の格好の遊び場となった。ある生徒は次のように記している。「特に一年の一学期には毎日のように裏山へ顔を見せていた。急な坂があって洞穴がありここで「かくれんぼ」や「ためおに」などをして遊んだ。急な坂をかけおりたのはよいが時には足からおりていくはずのものが頭の方から先になってしまっ



教室（昭和27年頃）、生徒が外套を着ている

たりした。なかなかスリルに富んでおり愉快であった。」（『中等科新聞』昭和32年7月20日）。

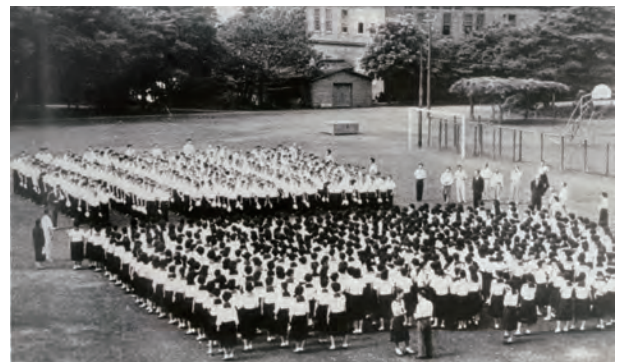
生徒が編集した『中等科新聞』や文集『からまつ』、そして『輔仁会雑誌』などには、校舎の老朽化をユーモラスに描いた記事がしばしば掲載された。『中等科新聞』（昭和28年2月15日）には、ストーブ設置を求める記事がある。「僕達は毎日、まるで豚小屋のような教室の中で、手をかじかませ歯をがちがちさせながら、勉強しています。…現在の様のような状態では、寒さをしのぐために教室内で暴れるのは、やむを得ないことだと思います」。生徒や父母の要望を受けて、同年12月全教室に石炭ストーブが設置された。昭和30年代に入ると1年生の生徒は「中等科の教室は前からボロだと聞いていた。なるほどそのとおりだ。まどなどは、どちらか片方によせないと落ちてしまう。ちょっと乱暴にしめるとガラスがずりおちてしまう。そんな時の下の教室はまことにぶっそうだ。かべもところどころひびがはいている」（『からまつ』15号、昭和32年9月）と記している。

また、女子部との交流を求める声も掲載された。「女子部の赤レンガを眼の前に眺めて暮らす我々中等科の位置は、実に悲劇的である。休みの時間には同じ運動場で遊びながら、一言も言葉を交えず、ただ横目でちらっと見合っていないければならぬ。今の二年以下は、初等科では同じ四ツ谷で、一緒に学んだり遊んだりして来たのに、戸山に来ると、こんどは口もきかずツンとしているのである。そこに不自然な空気がかもし出されて来る。…男女共学を唱える者も多数あるが、そこまでいかなくとも、女子部学生と話合う機会ぐらい作りたいというのが我々の望みである。」（『中等科だより』『輔仁会雑誌』173号、昭和27年1月）。

3. 再び目白へ

昭和31（1956）年1月16日付『学習院新聞』は、「男

子中等科の腐朽校舎改築の問題は前から学習院整備計画の一環として討議されて来たが場所を現状の戸山とするか、目白に移転するかは予算並びに目白移転に対する功罪で意見がまとまらず決定をみなかったものであるが、この程漸く意見がまとまり男中の目白移転が決定した」と報じた。昭和28年から「学習院整備五カ年計画」の検討が始まり、安倍院長や理事会は一貫教育推進の見地から男子中等科の目白移転を進めようとした。しかし「中等科の大部分の先生並びに生徒は移転に反対であった」『学習院新聞』（昭和32年10月7日）。『中等科新聞』（昭和31年2月24日）では、生徒の質問に対して安倍院長が「今は戸山に居るから、居たいと思って居ようが、目白に来れば、又目白が良くなるかも知れない。…現在の中等科の校舎は学習院の中で先ず最もひどいから是非、立派にしたい。しかし学習院は貧乏だから、そんなに大したことは出来ないが、好い加減なものにはしたくない」と答えている。



女子部との惜別式（昭和32年7月20日）

昭和32（1957）年8月、男子中等科は戸山を離れ、9月6日に目白の新校舎で始業式と落成式を行った。移転に先立ち7月20日には、女子部との惜別式が行われた。移転から一年を迎えた昭和33（1958）年、『中等科新聞』（9月6日）は目白移転についてのアンケートを実施し、6割以上が「成功」と回答したと報じた。一方で約三分の一の生徒が移転に不満を持ち、「これには『女子部がない』という理由が一番多かった」と伝えている。他方で『中等科新聞』が女子部での取材を行う際に窓口をつとめた長倉八重子教諭（生徒課長）は、男子中等科と女子部との関係について「時に応じて交流の機会を持つ。禁止はしないが奨励もしない、という女子部の態度を私から話す」（昭和33年7月28日）と日誌に記している。

* 本稿の作成にあたり、戸山で中等科時代を過ごされた方々から多くのご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

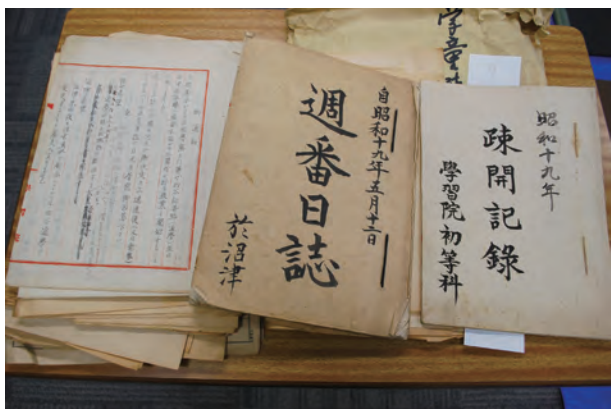
主な活動 (2019年7月～2020年1月)

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②各部署で保存期間満了となった文書ファイルの評価選別 (10部署)
- ③「文書ファイル管理簿の提出ならびに保存期間満了文書の評価選別について」「電子媒体の会議文書・資料の保存及び管理について (お願い)」文書配布

◆文書・資料の調査・整理及び目録作成

- ①アドミッションセンター移管ビデオテープ・カセットテープほかの選別・整理
- ②施設課移管短期大学校舎図面等資料の評価選別
- ③初等科所蔵資料の調査・整理 (9月、12月)



初等科所蔵沼津疎開記録 (昭和19年)

- ④女子大学4号館・女子部B館改修に伴う、仮設棟への女子部史料室移転作業
- ⑤学習院アーカイブズ所蔵資料・刊行物の再整理、資料目録修正
- ⑥学習院アーカイブズ所蔵ポジフィルムの整理
- ⑦宮内庁宮内公文書館所蔵文書の調査

◆史資料のデジタル化・修復等

- ①「土地建物録」(明治31～大正10年、7冊)のデジタル化
- ②戦後初期酸性劣化文書の修復 (継続)
- ③大学卒業アルバム (昭和51～53年)のデジタル化
- ④自動演奏ピアノの維持管理

◆史資料の受贈・購入

- ①華族女学校卒業生写真、昭和7年女子学習院卒業生謝辞



華族女学校本科卒業生 (明治36年)

- ②女子学習院卒業生写真、大正11年「学習院支那見学団旅行」写真帖ほか
- ③女子学習院関西地方修学旅行案内 (昭和8年)

◆講演会・教育支援・広報支援等

- ①大学・短大卒業50周年記念同窓会への協力
- ②学習院桜友会カレンダー製作への協力
- ③学習院輔仁会山岳部創立百周年記念会への協力
- ④島根県松江歴史館特別展「海将山口多聞を生んだ松江藩士山口家」への資料貸し出し
- ⑤全国大学史資料協議会東日本部会・立教学院展示館共催企画展「『新しい大学』の誕生—今日の大学の原点をさぐる—」への資料貸し出し
- ⑥宮内庁書陵部資料調査・収集への協力 (学習院アーカイブズ所蔵史資料の調査・撮影)

◆その他

- ①全国大学史資料協議会全国研究会・東日本部会研究会への参加、平和祈念展示資料館 (7月)、立教大学 (10月)
- ②神奈川大学資料編纂室研修会 (学習院において開催)、テーマ「業務文書の管理と保存—学習院アーカイブズの業務内容と課題」(8月)

学習院アーカイブズ・ニュースレター第15号
2020 (令和2) 年2月20日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285 (直通)
事務室 西5号館 (本部棟) 地下1階
<https://www.gakushuin.ac.jp/ad/archives/>